学位論文要約

〈翻訳〉の文学誌――近現代の移動と文化表象に関する日露比較文学的研究――

溝渕　園子

論文の背景と問題意識

翻訳は、文化の伝達において重要な役割を担うものの一つである。それは、知的・文化的動向を示すと同時に、異文化間の、またこれらの文化を含む地政学的な権力の動態をも照らし出す。昨今の、特に一九九〇年代トランスレーション・スタディーズにおいて、翻訳は文化的記憶の普及や保持のために必要不可欠な方法である一方、巨大な経済力と人口を後ろ盾にした諸言語が、マイノリティの言葉を萎縮させる暴力性を発動させる手段となりうる、という両面からの議論が多く見られる。また、文学の翻訳（翻訳者）を単なる仲介者として捉えるのではなく、文学的〈価値〉を創造する主体的な存在であり、一見、反〈文学〉的に映る〈文芸市場〉において中心的役割を果たす存在であると考える立場からも、様々な研究成果が提出されている。こうした問題意識は、翻訳が言語間に生じる力関係と無関係ではないことを明示すると同時に、翻訳者という主体が可視化される地点で、新たな議論を展開する土台となっている。さらに、それは、ある地域や言語文化圏における文化表象の流通・変容・消費をめぐる議論とも連結されうる可能性を有するものでもある。

従来の比較文学において、文学の翻訳をめぐる研究は数多くなされてきた。だが、翻訳を介在させることによって成り立つ、世界的文芸市場に流通する商品としての文学のイメージや実態については、視野外に置かれる傾向にあった。また、言語の翻訳の基本的理念となる二つの立場――つまり、言語はある普遍的な事象を名指す道具に過ぎず、各言語は置き換え可能であるとする言語道具説と、言語によってそれを使う人々の思考や見え方は異なり、各言語は置き換え不可能とする言語世界観説は、それぞれ翻訳の可能性と不可能性を裏付けるものとして長年議論されてきた。これらを踏まえた上で、今日的な研究の流れを射程に入れつつ、歴史的に構築されてきた翻訳文学の様々な様態に光を当てることによって、今後の議論の足掛かりを築きたい。

現在の文学を取り巻く状況を考慮すれば、グローバルな文学空間の現実的な展開を無視することはもはや困難であると言えよう。未来を展望する上で、例えば日本文学という〈商品〉が世界の文学空間の中でいかなる翻訳の力学に巻き込まれているのか、具体的に検証することも必要なのではないか。一九世紀後半以降の近代化の流れの中で形成された〈日本近代文学〉という商品が、世界文学空間の渦中へ巻き込まれていく翻訳の力学を読み解くことによって提示される様々な問題系は、現在の文化の世界性と地域性、受容や発信をめぐるパラダイムとも接続され得るものであろう。以

上の問題意識が本論文での議論の前提となっている。

問題の所在と研究の目的

本論文は、近現代の日本及びロシアの文学において、空間的、言語的なシステム間の移動と、文学を基軸とした様々な文化表象との相互関係を〈翻訳〉の観点から明らかにしようとするものである。日本近代文学における〈西洋文学〉の受容という問題は、日本の比較文学研究が文学の世界史を探求する中で従来取り組んできた主要なテーマであり、既に数多くの成果が存在する。また、外国文学の翻訳作品が翻訳文学という一つのジャンルと見なされることからも明白であるように、近年、文学の翻訳研究も急速に進展し、各国文学と世界文学との関係性をめぐる議論が活況を呈している。従来の研究の場で、従属的位置にあるものとして軽視される傾向にあった文学の翻訳は、一九七〇年代半ば以降、翻訳研究において根本的に発想を転換させたポリシステム理論（polysystem)を基盤に据えることにより、自国の文学の一分野として扱われる翻訳文学へと変化した。「翻訳」、つまりtranslationの語源はtrans ＝ 横切る ＋ la｜tus ＝もたらされる、であり、またロシア語のперевести（完了体）はпере=渡る、越える＋вести＝運ぶ、持って行く・来る、であることから、まさに何かを越える「移動」を意味するものと言える。翻訳には、語源的レベルにおいて、すでに「移動」という意味が内包された行為だと考えられる。

こうした先行論を参照しつつ、本論文では、今日の翻訳研究（トランスレーション・スタディーズ）の理論的到達点を視野に入れた上で、文学における異文化の受容（摂取）の問題を〈翻訳〉の視点から再考する。日本とロシアの間で、互いの文学や文化が、翻訳者や作家たちによっていかに読み替えられたのか。そして、それはいかなる翻訳システムと関わっていたのか。翻訳を、閉じた複数の言語共同体間をつなぐ〈媒介者〉と捉えるにとどまらず、空間的、言語的移動との関わりにおいて、翻訳を文化表象の攪乱契機をもたらす媒介／行為として意味づけることを試みる。それを通して、〈文学〉という一つの制度を問題化したい。

文翻訳を介在させることによって成り立つ、世界文学「市場」に流通する商品としての文学のイメージや実態をふまえて、近現代の日本及びロシアの文学における相互の文化表象と空間的、言語的な移動の関係を様々なレベルで考察する。

分析の視点と対象

長年、翻訳には、正当な文学的価値が認められず、原典（オリジナル）の下位に位置づけられる従属的な存在と考えられ、原典こそ最良の価値を持つものとされてきた。こうした認識に大きな転換を迫ったのが、ポリシステム理論（polysystem）である。この概念はロシアの文学理論に由来するもので、一九七〇年代半ば以降、イーヴン＝ゾウハー（Even-Zohar)

によって、ヘブライ文学研究を基礎にしたポリシステムモデルが提唱された。このモデルでは、そこでは、個々の文学作品だけを見るのではなく、文学のジャンルと伝統の全体、そして最終的には社会秩序全体をそれ自体のシステムだと見なされる。この枠組みをさらに拡大し、文学の発展についてもシステムの変化と捉え、「文学」とは単なる作品の集合体ではなく、より広く文学作品の作成・振興・受容を支配する力、つまり〈制度〉だと捉えたのが、ポリシステムモデルである。ここで重要視される視点として、ポリシステムを構成する各階層や区分は、互いに支配的な位置をめぐって絶えず競っているとする見方がある。文学ポリシステムでは、文学の各ジャンルがすべて支配的位置を求めて競うため、中心部と周縁部の間には常に緊張関係が存在する。この理論では、翻訳文学を自国の文学界の一部として見る、一つの領域として文学史に組み込み、訳文は原文によって決定されるのではなく、目標文化の文学において翻訳がどのような位置づけにあるかによって決まるとされる。原典を絶対視する、あるいは権威化するという文学の見方に、根本的な発想の転換を迫るものであった。本論文でもこの立場をとり、以下の各論では〈正統〉と見なされてきた作家や作品の他、周縁に置かれてきた翻訳者や翻訳文学を取り上げ、双方から文学という制度について考察していく。

論文の構成

本論文は、以下の六章から成る。日露相互の文学空間の中で、翻訳と文化表象がどのように関わり合い、各々の文化をめぐる自己像や他者像の形成と変容の過程に組み込まれていくのか、また翻訳は各々の〈文学〉というシステムをいかに照射するのかという問題について、具体的な作品の分析を通して考察した。

第一章「文学の翻訳から翻訳文学へ」では、転換期にあった明治三九年の二つの翻訳論、昭和二〇年前後の太宰治の翻案についてのエッセイ「古典竜頭蛇尾」、平成六年頃の村上春樹の小説「ねじまき鳥クロニクル」を取り上げ、以下の各章での議論の前提となる諸問題を提起した。ここで扱ったテクストは、それぞれ順に、文学の翻訳についての議論から、従来の領域としての翻訳文学、さらにそこから翻訳の核ともいえる性質を戦略的に創作に転用した新たな〈翻訳文学〉へと展開する過程を描き出しているものと見られる。明治三九年の翻訳論では、翻訳の文体の適正に端を発した細分化がすでに始まっていた。また、翻訳者による文体の個性の問題も浮上しており、それは翻訳者の可視化と相まって、当時の読者たちにとって翻訳者の介入に対する意識化につながるものであった。また、太宰のエッセイが提起する問題は、古典に書かれた素材を「現代」の形式で〈翻訳〉することの本質的な不可能性あった。それは〈翻案〉という形式によってしか果たし得ないとする、翻訳に対する太宰の明敏な洞察は、翻訳可能性と翻訳不可能性という、翻訳学における〈伝統〉的な議論をも、巧みなレトリックを用いて鮮やかに反照している。翻訳者の可視化は、〈媒体〉が〈主体〉性を持つことへの意識化に連結する。村上春樹の小説「ねじまき鳥クロニクル」は、ある言語空間から別の言語空間へ、物語の時空を越えて、言葉を〈移し〉／〈写し〉ながらも、〈媒体〉を経た瞬間、そ

れは必ず何らかの形で書き換えられてしまう物語である。主人公であると同時に主な語り手でもある岡田トオル（亨）の一連の行為は、翻訳者が起点言語（原典）を目標言語（翻訳）に移す際に生じる現象と同様のものと捉えられる。トオルは翻訳者の性質をそなえた存在であり、「ねじまき鳥クロニクル」は、翻訳が持つ根本的な性質と、村上春樹が翻訳の一つの姿を主張した小説だと言え、その意味で新たな形の〈翻訳小説〉の創出だと考えられる。

第二章「移動の文脈における〈翻訳者〉と文化翻訳」では、文化翻訳の視点から、劇作家・小山内薫及び作家・宮本百合子のロシア／ソ連外遊という移動体験に基づく演劇論や紀行文を主要な分析対象とする。主に、それぞれの理念の変化やそこに認められる文化表象、及びそれらを成立させる構造を考察した。ロシア演劇や都市モスクワという文化が、日本の観客や読者に向けていかに翻訳されたかを明らかにし、小山内と宮本が〈翻訳者〉という主体を生きていたという、従来論じられなかった側面に光を当てた。ロシア旅行の経緯を踏まえれば、小山内と宮本には、日本の観客／読者に向けて、自分が見聞したロシアの演劇や都市風景をいかに日本語で表現するかという自覚、つまり翻訳に通ずる意識が働いていたことが十分に推察される。自由劇場時代の小山内薫の演出に対する認識と方法には、第一次ロシア・ヨーロッパ旅行という移動を通して得られた観劇体験を転機とする変化があった。従来からの主役中心の演劇観、つまり脇役たちは一人の主役に従属するという演出から、主役と脇役の主従関係が無化された演出へと変わる。その一方、小山内の〈翻訳〉したロシア演劇、アンドレーエフ「星の世界へ」は、実際には舞台装置や衣装において、ここではないどこかを描いた象徴主義の原作を、「ロシア的に」仕立てようとするあまり、リアリズム風に演出するというねじれた構造を持つ面もあった。また、宮本百合子が自らの旅行体験をもとに描いた都市空間モスクワは、シンメトリックな構成のうちに新旧体制の諸要素が両義的に混在する、フィクションの都市「モスクワ」が二枚組のタブローによって表現されたものであった。そして、そのモスクワは、ロシアを描きつつ、同時に日本をも映し出している。一方、ほぼ同時期に日本に短い期間滞在した、ロシアの作家ピリニャークの『日本印象記』もまた、日本を描きつつ、同時にロシアをも映し出している。この時、二つのテクストにおけるモスクワと日本は、描き出す対象というよりも、むしろ〈媒介〉に転じるのである。

第三章「日露戦争期前後の日本の翻訳文学」では、日本において最初のロシア文学の翻訳ブームを迎えた日露戦時下でせめぎ合っていた複数の翻訳規範を探った。レフ・トルストイ「クロイツェル・ソナタ」の翻案小説「名曲クレーツェロワ」や、アントン・チェーホフ「六号室」の二種の翻訳（瀬沼夏葉と馬場孤蝶による翻訳）、レフ・トルストイ「コーカサスのとりこ」の三種の初期翻訳の分析を通して、書き直しと書き換え、直接訳と重訳の価値づけ、文学化と翻訳の等価性など、現代の翻訳論にも連なる複数の規範が機能していたことを指摘した。「クロイツェル・ソナタ」がキリスト教主義的な恋愛結婚観の欺瞞性を糾弾する物語であったのに対し、「名曲クレーツェロワ」は痴情のもつれによって面子をつぶされた男の復讐の物語へと変奏されてい

る。このリライトされたテクストは、社会に対する〈告発〉ではなく個人の内面の〈告白〉へと転じ、後に、性愛のディスクールではなく、〈自己告白〉のディスクールへと接続される可能性を持つものとなる。また、チェーホフ「六号室」に関しては、原文の事実性と、解釈や翻訳の規範性とが二重写しになる世界の中で翻訳された瀬沼夏葉訳「六号室」は、二つの言語と文化の間に横たわる境界線の存在を指し示し、さらに翻訳の文学化という問題を浮上させるものである。また、トルストイ「コーカサスのとりこ」の明治期の翻訳は、原典にある通りの児童文学の読み物でなく、成人向けの戦争教訓小説のフロンティアとして捉えられる。この翻訳作品に見られる翻訳のノイズは、例えばロシア帝国とコーカサスの先住民族との関係を、大日本敵国と植民地台湾との関係にスライドさせるなど、「コーカサスのとりこ」を日本の軍国精神の規範や植民地主義の正当性を示す、擬似〈ロシア戦争小説〉としてリプロデュースする面を持ったと考えられる。以上に取り上げた作品群は、明治二〇年代から三〇年代にかけての日本のロシア文学受容の多様性を映し出しており、この当時のロシア文学に対するイメージは流動的であったことを示している。

第四章「日本文学のロシア語翻訳とロシア文学における日本人表象」では、ロシアにおける日本ブームとその文化的消費の基底にある、日本文学の翻訳をめぐるシステムと文化表象としての日本人について検討した。旧ソ連／ロシアの芥川文学と三島文学の翻訳事情から、文学の古典（カノン）に吸収されそれを補完する〈正統〉な翻訳文学としての芥川文学のありようと、旧来の〈正統〉を破壊する象徴として機能する〈周縁〉の翻訳文学としての三島文学の様態を明らかにした。また、ソ連時代の現代大衆小説「オキヌさんの物語」（V・ピークリ）のように、文化表象としての〈日本〉や〈日本人〉という文化表象が、ジャポニスム（日本憧憬）とジャパノフォビア（日本嫌悪）とを共存させながら、翻訳された日本文学のモチーフを摂取し、旧ソ連時代から現在に至るまで形成・変容の途を辿ってきたことに言及した。この小説における日本人表象は、陸続きという地理的環境によりアジア地域を飲み込むようにして版図（はんと）を拡大してきたロシア特有の現象が見られる。東洋は完全なる他者ではなく、東洋を内なる他者と自認するロシアにおいて、西欧的オリエンタリズムを内面化しつつ醸成されたロシア的オリエンタリズムにより、日本人表象は、帝国主義の犠牲となった憐憫の情を傾ける存在であると同時に野蛮な敵として憎悪のまなざしを向ける対象でもあるという両義性を孕んだ性質を帯びている。

日本においてもまた、文化表象としてのロシアは、日本人のロシアに対する憧憬と嫌悪とを混淆させつつ形成され、そこにロシアの翻訳文学も関わってきた。この複雑さは、西洋であるロシアとの間で戦争が起こり、それに勝利したことが影響していると考えられ、その様相について、第五章「異文化表象と女性の周縁化」で論じた。夏目漱石「それから」と日露戦争期の少女雑誌『少女界』を取り上げ、前者では表象としての「恐露病」が文学的モチーフとして消費されたことと、後者ではロシア像を反

復的に提示しながらもロシアの具体像から少女読者が引き離されていく矛盾した構造を示し、それがロシア表象の両義性を生み出した要因の一つであると指摘した。また、他者としての異文化は、必ずしも、自己の〈外〉に存在するものとは限らない。ロシアが自己の内に東洋を見出すのと同様に、日本にも自己の内に西洋を見出す面があることに目を向ける必要があるだろう。そうした自己の〈内〉なる文化に異文化を見出す視線があることを、紀行文「五足の靴」の分析を通して考察した。北原白秋ら五人づれの紀行文「五足の靴」は、移動する旅行者のまなざしによって、平戸・長崎・島原・天草という、いわゆる〈辺境〉を内なる他者として表象し、そこに古典籍や史跡を対比的に導入することによって、内なる〈異郷〉という文学的なトポスとしての地位を作り上げていくものであった。また、夏目漱石「それから」は当時の新聞メディアの言説が巧みに用いられており、読者に共有される「恐露病」の否定的形象を取り込みつつ、ロシアという異文化表象を通して、社会や文壇に対する批判を行っている。さらに、明治期少女雑誌発刊ブームの先駆けとなった最初の少女雑誌『少女界』における〈ロシア〉は、「文明国」とそれ以外とに二分する世界地図の中で、間接的に〈ロシア〉が日本よりも劣位に措定されていた。その一方、ロシアを〈敵〉と見なす共有感覚と否定されるべき価値とを前提としながら問題領域が設定され、限られたトピックによって表象としてのロシアが形成されている。だが、こうしたロシア像は、ロシアは克服すべき〈敵〉であるとする論拠が十分に示されていないため、その形象が具体性を有さず、戦争という時代状況において少女の位置づけが流動的であったこととも関わる形で、ロシアという問題は曖昧な領域として立ち上げられていた。

第六章「翻訳の可能性と文学の越境性」では、様々なレベルの文学表象について、〈文学〉とミュージアムとの関係まで議論を広げ、〈翻訳〉から見通す文学の未来の可能性について言及した。翻訳とは言語交通と闘争の場であり、翻訳不可能性の問題から逃れることはできない。それを夏目漱石「坊つちゃん」の露語訳から跡づけていった。だが、そうした翻訳不可能性は、ネガティヴな面を持つだけでなく、新たな文学戦略を錬成する場でもあることを水村美苗「私小説 from left to right」のテクストの分析を通して示そうとした。さらに、翻訳は、それが〈媒介〉行為である以上、〈文学〉とそれ以外の文化領域との間を架橋する可能性を有していることにも目を向けるべきだと考え、作家と文学ミュージアムが、言語と視覚表象を包括するような文学空間を形成していることを明らかにした。「坊つちゃん」のロシア語訳はそれ自体、日本特有とされる事物に注釈がつけられたり、あるいは省略されたりする形で〈日本語〉や〈日本文化〉を明示する媒体となっている。また、翻訳者が解釈者として〈読みたい〉文学テクストと、表現者として読者に〈読ませたい〉文学テクストの間で揺らぐ、主体のありようが、翻訳の技法に顕著にあらわれている。また、水村美苗「私小説 from left to right」は英語交じりの日本語文で書かれており、この小説の異言語混交文は、内面化された国民国家の規範と英語による一元化された言語支配に対する抵抗を主題として、「日本人」によって必然的かつ戦略的に選び取られた文体であると言えよう。これはまさに、それまで自明視

されていた境界を可視化し、諸々のカテゴリー読者に改めて意識化させ、さらにそれらを越え、混じり合い、そして分裂する――動的な言語的想像力の実践であった。さらに、「夏目漱石内坪井旧居」のような作家ゆかりの建造物は、単なる作家や文学の〈背景〉として実体的に整理されたり、研究の裏付ける材料と見て作家論や作品論に回収されたりするだけの存在としてのみならず、旧居ミュージアムというメディアによって、作家が何らかの形で〈翻訳〉された姿と捉えうる。文学ミュージアムは、作家像やその文学を〈翻訳〉する書物であると同時に、一つの媒体としてそこに働く〈翻訳〉のメカニズムや力学を明示する装置でもある。

結論

以上の各論を通して、概して、第一章から第三章までは、翻訳という言語的移動の媒体、及び文化表象と空間的移動との関係について論じ、第四章から第六章までは、翻訳による表象の文化的消費と、制度としての〈文学〉との関係を視野に入れながら論じた。日本とロシアの近現代文学における翻訳の様態とその位置づけを様々なレベルで追うことによって、世界文芸市場というシステムと各国〈文学〉の制度との関係を考察する回路の一つが示されたと考える。翻訳は文学的価値を持つという文脈において〈文学〉という制度と共犯関係を結びつつ、それに対して抵抗する反逆分子ともなるという、両義性をはらんだ営為であることを明らかにした。それは、文学という制度の中に生きる作品や作家そのものの性質と切り結ぶものであるがゆえとも考えられる。

日本において、近代文学の形成と変容の歴史は、翻訳という営為と深く結びついている。明治期以来、書き手や読み手の立場から、翻訳に関与しなかった作家はいないと言っても過言ではない。日本文学史上の芸術思潮や文学理念が、日本の翻訳文学史上のそれと呼応することは、従来から指摘されてきた。ロシアをはじめ外国文学・芸術の翻訳は、各国文学・芸術の紹介であると同時に、そこから創作上の手法やスタイルを摂取するための源泉でもあった。こうして成立した日本近代文学を、旧ソ連／ロシアは翻訳し、自国の文学システムに取り入れ、各時期の文学的〈正統性〉を不断に再生産していった。また、実践としての異言語間翻訳は、自国の文学に内在する制度を照らし出し、それに対する抵抗や破壊の戦略を不断に生み出す動力にもなり得る。また、文学とそれ以外のジャンルという異なる記号との間に成立する翻訳は、従来の翻訳の概念を拡大し、それぞれの文化領域を架橋する可能性をも有しているのである。